

### 九州方言における甌島方言の敬語運用

The usage of honorifics in the Koshikijima dialect of Kyushu Japanese

酒井雅史（大阪大学）

msakai@let.osaka-u.ac.jp

【要旨】九州方言では、ゴザルやシャル、ンシャル・ナハル・ナル・ナス、ス・サス・ラス、ヤルなど多彩な敬語形式が用いられている（上村 1983）。その中であって甌島方言は、隣接する他の鹿児島方言と同じくヤル・ラルが使用されているが、その敬語形式をどのように用いるかといった運用は島内で様ではない。すなわち、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用する里方言、第三者待遇でのみ敬語形式を使用する平良・手打方言、いずれの場面でも敬語形式を使用しない長浜方言というように4つの地域それぞれで敬語の使い分けの型が異なる。

本発表では、甌島方言の敬語運用について九州方言とのかかわりからその特徴について考察する。具体的には、『方言文法全国地図』第6集のデータを用いて、九州方言における敬語形式および運用の型の分布を確認し、その特異性について指摘する。そのうえで、甌島方言を含めた九州方言の敬語運用および、甌島方言の九州方言における位置づけについて考察する。

#### 1. はじめに

九州方言では、ゴザルやシャル、ンシャル・ナハル・ナル・ナス、ス・サス・ラス、ヤルなど多彩な敬語形式が用いられている（上村 1983）。その中であって甌島方言は、隣接する他の鹿児島方言と同じくヤル・ラルが使用されているが、その敬語形式をどのように用いるかといった運用は島内で様ではない。甌島方言の敬語に関する研究は概観的なものが多く、マラスル・メーラスルが残存していたことに関する報告のある春日（1931）や九州方言学会（1991）、国立国語研究所（2006）などでヤルとラルが用いられているほか、丁寧語としてモスを使用することが確認できるのみである。

本発表では、九州方言内における甌島方言の敬語運用について特異性とその位置づけについて考えることを目的とする。以下、2節で『方言文法全国地図』第6集のデータを用いて、九州方言における敬語形式および運用の型の分布を確認したのち、3節で酒井（2019）をもとに甌島方言の敬語運用についてみる。そのうえで、4節で九州方言における甌島方言の特異性を確認し、そこから導かれる結論を提示する。

#### 2. 九州方言における敬語運用の分布

本節では、『方言文法全国地図』第6集（以下、GAJ）所収の275図（一般動詞）・276図（敬語動詞）【対者待遇場面】と295図（一般動詞）・296図（敬語動詞）【第三者待遇場面】を資料として、九州方言における敬語形式および運用の型の分布を確認する。

GAJではそれぞれ以下のこと訪ねた際の回答が地図化されている。

【対者待遇】 275・276 図

(1) この土地の目上の人に向かって、ひじょうにていねいに「どこへ行くのか」と行先を訪ねる時どのように言うか。

【第三者待遇】 295・296 図

(2) 尊敬している先生のことを話題にして、「あの先生は、いつ東京へ行くのか」と友達に聞くとき、どのように言うか

本発表の分析では、上記調査文で得られた回答の「行くのか」にあたる箇所敬語形式が使用されているか否か、使用されている場合いずれの敬語形式が使用されているかといった観点からデータを処理し、地図化した。なお、併用回答がみられた地点では使用する敬語形式が異なる場合のみ採用し、準体助詞の有無や終助詞の違いは捨象している。この観点による分析から、敬語運用のタイプは、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用する(◆)、対者待遇では敬語形式を使用するが第三者待遇では敬語形式を使用しない(◇)、対者待遇では敬語形式を使用しないが第三者待遇では敬語形式を使用する(●)、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用しない(\*)といった4つのタイプに分けられる。結果は図1の通りである。



図1 九州方言における敬語運用の種類

図1の分布から九州方言の敬語運用について次のことが指摘できる。

- (3) 九州方言では、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用する(◆)敬語運用のタイプが最も多くみられる。甌島方言では里方言がこれに含まれる。
- (4) 九州方言の中では、第三者待遇では敬語形式を使用せず対者待遇でのみ敬語形式を使用する(☒)タイプが大分にまとまった分布をみせる。また、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用しないタイプ(\*)も大分で最も多い。
- (5) 甌島方言の手打方言にみられる敬語運用のタイプ(●)は九州方言の中ではまれである。

### 3. 甌島方言における敬語運用

2節ではGAJのデータをもとに九州方言の敬語運用について概観した。本節では、酒井(2019)における記述から、甌島方言の敬語運用に関する概要を述べる。

調査は、甌島内の里、平良、長浜、手打の4地点で2011年9月から2014年7月にかけて行なった(詳細な地点はワークショップ概要の[地図2]参照)。調査にご協力いただいたインフォーマントは、それぞれの地点で言語形成期を過ぎた60代以上(調査時)の男女8名である。

調査では、対者待遇場面および第三者待遇場面において設定した人物に対してどのように言うかについて尋ねた。具体的な調査文は以下のとおりである。

#### 【対者待遇】

- (6) Xに「今日の夏祭りに行くか」と尋ねるとしたら、ふだんどのように言いますか。
- (7) Xに「花火の時間までには来るか」と尋ねるとしたら、どのように言いますか。
- (8) Xに「明日は家にいるか」と聞くとしたら、ふだんどのように言いますか。

#### 【第三者待遇】聞き手=〈ウチ・対等〉または〈親・対等〉

- (9) 「Xは今日の夏祭りに行くだろうか」と尋ねるとしたら、ふだんどのように言いますか。
- (10) 「Xは夏祭りに来るだろうか」と尋ねるとしたら、ふだんどのように言いますか。
- (11) 「Xは公民館にいるだろうか」と尋ねるとしたら、ふだんどのように言いますか。

調査によって得られた回答をまとめて示したものが表1である。各方言における敬語形式が対等な人物や目下にも使えるか否かといった適用範囲には違いがある。詳細については酒井(2019)を参照いただきたい。

表1から、甌島内のそれぞれの地点における敬語運用は地域によって異なることが分かる。すなわち、里方言では、対者待遇・第三者待遇ともにヤルを使用する敬語運用のタイプ(◆)となる。平良方言では、対者待遇で敬語形式を使用せず、第三者待遇でのみラルを使用するタイプ(●)である。また、手打方言も同様に対者待遇で敬語形式を使用せず、第三者待遇でのみ敬語形式を使用するタイプである(●)。ただし、60代は対者待遇でヤルを第三者待遇でヤルおよびラルを使用し、80代は対者待遇で敬語形式を使用せず第三者待遇でラルを使用するといった世代差がある。長浜方言では対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用しない(\*)。

表1 甌島方言における敬語形式の使い分け（酒井 2019:97 表6 をもとに作成）

|      | 対者待遇 | 第三者待遇 |
|------|------|-------|
| 里方言  | ●    | ●     |
| 平良方言 | -    | △     |
| 長浜方言 | -    | -     |
| 手打方言 | -    | ●△    |

[凡例] ●：ヤル △：ラル  
-：無標形式

#### 4. 九州方言における甌島方言

2 節でみた九州方言全体にみられる敬語運用のタイプのうち、大分にまとまって分布する第三者待遇では敬語形式を使用せず対者待遇でのみ敬語形式を使用するタイプの運用 (㊄) 以外のすべてが甌島方言にみられる。特定の方言域内で異なる敬語運用のタイプがみられることについては管見の限り報告がない。敬語運用の面において甌島方言は九州方言および日本語諸方言の中でも特異であると考えられる。

では、敬語運用の面で特異性がみられる甌島方言の結果からどのようなことが考えられるだろうか。まず、敬語運用ではなく使用する形式について確認する (図2)。敬語運用面を確認するために用いたデータは、場面設定で「土地の目上の人にむかって」(対者待遇)「尊敬している先生のことを話題にして」(第三者待遇) というように目上の人物に対する敬語使用に関するものであった。図2をみて分かるように、この場面では特定形による回答が多くみられる。敬語接辞の分布を確認するため、GAJ271 図の「この土地の目上の人にむかってひじょうにていねいに「ひと月に何通手紙を書きますか」と聞くとき」の場面に関する分布 (図3) とあわせて考える。

図2および図3から、対者待遇・第三者待遇ともに敬語形式を使用する里方言では3節でみたようにいずれの待遇場面においてもヤルが使用されることが分かる。敬語形式の全国的分布については周圏分布が認められることが彦坂 (2014) において指摘されているが、甌島方言を含む鹿児島方言では同様にヤルを用いている地域が多い。甌島方言内において里方言は、フェリーの停泊する九州本土と接触する頻度の高い方言である。敬語形式の周圏分布から導かれる伝播の過程と、九州本土との言語接触の頻度からすると里方言は甌島方言内において新しい敬語形式を使用していると言える (12)。

(12) 〈古〉 平良方言 (ラル) > 手打方言 (ラル・ヤル) > 里方言 (ヤル) 〈新〉

しかし、敬語運用の通時的変化を考えると、この新古関係は安易には首肯しがたい。日本語の敬語運用の通時的変化とは、金田一 (1942・1952) で提唱された「タブーの時代→絶対敬語の時代→相対敬語の時代」というものである。第三者待遇の中央語における変遷について述べた永田 (2001) においても (13) のような指摘がある。以上のような敬語運用の通時的変化に関する知見から、甌島方言における敬語運用の新古関係は (14) のようになる。

(14) 〈古〉 手打方言 > 里方言 > 平良方言 〈新〉

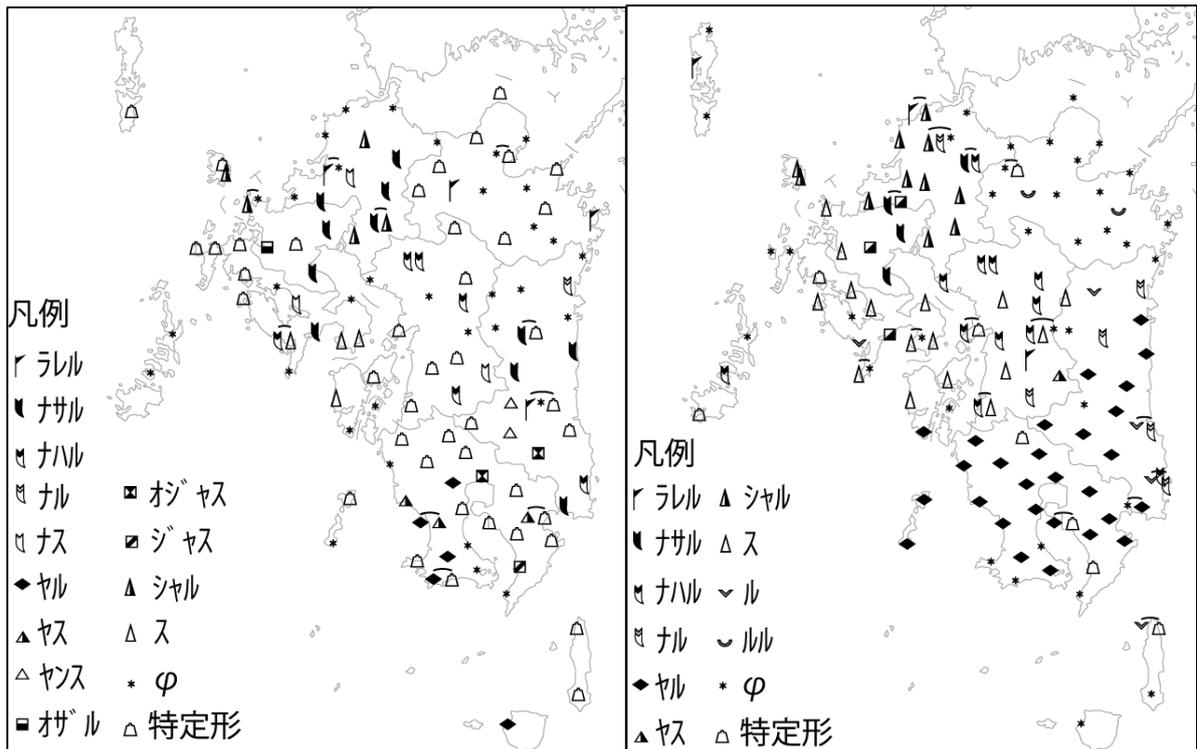


図2 GAJにおける回答形式（左：対者待遇、右：第三者待遇）

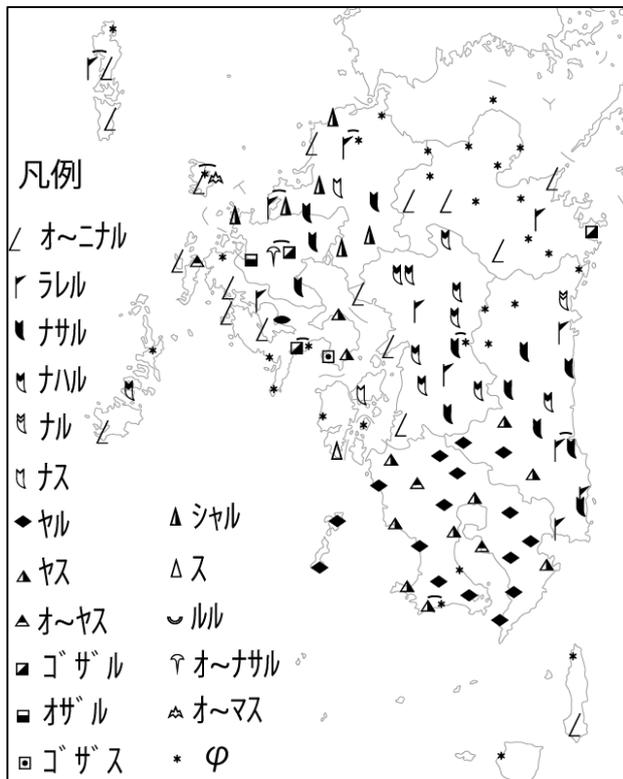


図3 GAJ271 書きますか

(13) 要約すると、現在使われている公的敬語体系は公家の言葉を武家が引き継ぎ、その武家の言葉を明治期の標準語が採用し、教育や放送等の手段で全国へ普及した。敬語形式としては身分敬語、序列敬語、内外敬語の順に聞き手指向性が強まる傾向を見せているというのが概観である。しかし、私的言語では絶対敬語的性格が強く、一般庶民や支配階級でも女性は私的言語を使用する傾向が強い。方言では敬語を持たない地域も存在するが、存在する地域においても絶対敬語体系であり、相対敬語は中央から伝播していない。

(永田 2001:282)

(12) と (14) から、甕島方言の 4 つの地域における敬語についてみることによって次のことが分かる。

(15) 特定の方言において、用いる敬語形式とその敬語形式をどのように使用するのかといった敬語運用の間には関連がみられない。

## 5. まとめ

本発表では、九州方言における敬語運用の型の分布を確認したうえで、甕島方言における敬語運用の型の分布が特異であることを述べた。また、敬語運用の型と用いる敬語形式の関連について、敬語運用の通時的变化を踏まえたうえで甕島方言を観察することで用いる敬語形式と敬語運用には積極的な関連がみられないのではないかとすることを結論として提示した。このことは、永田 (2001) が「**相対敬語は中央から伝播していない**」と述べるように、敬語運用をはじめ言語行動にあずかる言語現象については、形式の伝播はあっても運用は伝播しないことを示唆する。また、触れることが出来なかったが、森 (2017) が「**敬語のような規範意識に強く影響を受ける**カテゴリーの変化は、規範性が相対的に弱い地域の方言との対照によってこそ、その特徴が浮かび上がる (森 2017:25)」と述べるように、九州方言だけではなく詳細な記述のある関西方言なども対照したうえで甕島方言の記述を深めていく必要がある (甕島方言をはじめ、日本語方言の敬語については概観にとどまるものが多く、各方言における詳細な記述を積み重ねていく必要があることは言うまでもない)。本発表では九州方言における甕島方言という形でその試みの一端を提示した。分析等にご批判・ご教示だき、議論を深めていきたい。

## 参考文献

- 春日政治 (1931) 「甕島に遺れるマラスルとメーラスル」『**九大国文学**』2, 九大国文学研究会。
- 上村孝二 (1983) 「九州方言の概説」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一編『**講座方言学 9 九州地方の方言**』国書刊行会。
- 九州方言学会編 (1991) 『**九州方言の基礎的研究 改訂版**』風間書房。
- 金田一京助 (1942) 『**国語研究**』八雲書林 (『**金田一京助全集 三**』(1992) 三省堂)。
- (1959) 『**日本の敬語**』角川書店 (『**金田一京助全集 三**』(1992) 三省堂)。
- 国立国語研究所 (2006) 『**方言文法全国地図**』第 6 集, 国立印刷局。
- 酒井雅史 (2019) 「甕島方言の素材待遇形式の運用とその地域差」窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵 (編) 『**鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相**』pp83-103, くろしお出版。
- 永田高志 (2001) 『**第三者待遇表現史の研究**』和泉書院。
- 彦坂佳宣 (2014) 「**尊敬語補助動詞類の分布とその史的経緯**—『**方言文法全国地図**』「**書きますか**」を主として—」『**論究日本文学**』100, pp.175-193, 立命館大学日本文学会。
- 森勇太 (2017) 「**敬語運用への新視点**」『**日本語学**』36-6, pp.16-26, 明治書院。

【付記】本発表は、JSPS 科研費 19K20788 および 26244024 の成果の一部である。